

2022年3月分総評 杉本真維子

「花疲れもう三百年分寝な」(立花ぼとん) 東京都

三百年分寝なければ回復できないほどの花疲れでしょうか。人とは比較にならないほどの花がもつ潜在的なパワーに圧倒されると同時に、三百年後の目覚め(来世?)になぜか豪華絢爛な花の世界を予感して心が躍りました。

「おじさんが踏んでたコートの手／つこにねずみみみたいな体温移る」(小林奔) 神奈川県

不快な出来事の手にも残されていく他者の体温のかけら。その生々しくて扱にくいものに囲まれて生きるという社会の無理難題に、私たちは挑み続けています。

「水仙は大講堂にそよぐ挙手」(奎いう子) 佐賀県

まっすぐに伸びる茎のたくましさ、しなやかさ、瑞々しいかがやき。挙手というたくみな比喩が、水仙が咲いている、という一文だけでは決して伝わらないものを伝えています。

「鍋底から我先にと立ち上る／泡」(夜) 東京都

鍋底から立ち上るときの動作のようなものを思い起こし、私もかつて泡だったのではないかというほどの深い共感をなぜか覚え、面白く思いました。

「とおくの国の／歓声や怒号や悲鳴は／そよそよと夜風／電線／ゆら ゆら」(氷丸) 茨城県

こんなふうにかぼそく、でも消えることなく、遠くから届いているものがあるのですね。夜というつつまじやかな世界にこそ、耳目はひらかれるべきかもしれないと思いました。

「三畳の部屋から風呂屋へ歩く時／減ってしまった月夜を思う」(マズルカ) 山口県

欠けるのではなく、減るという捉え方がポイントでしょう。そのように人もまた見えない嵩をもつのかもできません。命が有限であることの意味がせまるようです。

「ざまあみろ髪を若葉に染めている」(五味はこ) 神奈川県

「ざまあみろ」の大胆な響きが言葉そのものの意味を超え、読み手をすがすがしい気持ちにさえさせます。「前髪に木の芽灯して入社する」もレトリックを楽しみたい作品。なんだか入社が楽しみになりそうでもあります。

「書いて書いて書いて書いて／／なくなれ！わたし！」(tae) 福島県

まさに言葉とは「わたし」を削った生々しいかけらなのかもしれません。言葉は生きていくといわれるのはそれゆえですが、その言葉を書きつけた文字は「わたし」がいなくなったあとでも残るのですから、それはもう強烈なものです。「息吸って吐く／真ん中にある／自分の空っぽ」も表現の原点を言い当てていると思います。

「トルソーを抱えて歩く／立ち止まる交差点では丁寧に置く」(まぢりこ) 埼玉県

経験はないはずなのになぜか覚えのある動作とそれに伴う静かな感情。トルソーとはじつは何を意味するものなのでしょう。考えさせられます。

「不器用に 話す私を／遮って 立ち上がる君／寂しいところ」(モラン) 神奈川県
遮られた「私」も、余裕をうしなっている「君」も、どちらも寂しいところに見えます。
同じところなら繋がればいいのに、それもできないところが、寂しさの本当の罪かもしれません。

「赤信号の一步目が／なぜか大きく出せるのは／天国に一步近づくから」(いまはじまるの) 兵庫県
うっとりとするような甘い注意喚起というものがあるんですね。ちなみに横断歩道の白い
ストライプ模様のあいだの暗闇には何が潜んでいるのでしょうか。あわせて気をつけたい。

「駅前は 星屑たちの 控室」(im) 沖縄県
駅前だけが煌々と輝く地方都市をイメージしました。駅前の光の正体はやがて夜空へと飛
び立っていく星屑たち、ということでしょうか。出番を待つ彼らの弾む心、賑やかなおし
ゃべりが、壮大な星空へと昇華されていくさまを思い、眩暈を覚えました。そんなところ
までこのシンプルな作品は読み手を連れていきます。

それでは次回も、磨き上げた作品を楽しみにお待ちしております。